

2年1組

 あんぜんでいごちのよい 小屋を作りたいな
 ～うこっけいさんとのくらし～


あんぜんに いごちよく すごせるようにしてあげたいな

10月のある日、子どもたちは鳥骨鶏がえさ箱の中でひっくり返りながら遊ぶ様子を、じっと見つめていました。えさを食べるための箱の中で、体をこすりつけるように動く姿に、「砂あびをしたいんじゃない」「ここじゃなくて、ほんとは砂の中でごろごろしたいのかも」と声が上がりました。小さな変化に気づいた子どもたちは、しばらく黙って様子を観察し、「砂場をつくってあげたい」という思いを膨らませていきました。しかし、今の小屋はせまく、砂場を置く場所がありません。さらに、日ごとに元気に動き回るようになった姿を見て「走ると、すぐはっしょにぶつかっちゃうよ」「なんか、前よりせまそうに見える」と、広さが足りないことに気づく子もいました。体が大きくなったこと、動きが活発になったこと、その変化を自分たちの目で確かめながら、「もっと広いところで、あんぜんにいごちよく過ごせるようにしてあげたい」という思いが、クラスの中に少しずつ広がっていきました。



そこで、まずは網で囲った広場を作ってみました。実際に様子を見てみると、Aさんが「ゴミを食べちゃうかもしれないよ。あぶない」と心配の声をあげました。その言葉をきっかけに、子どもたちの関心は「広さ」だけでなく「安全」へと向かい「ちゃんとした広い小屋にしてあげたい」「安心して過ごせる場所をつくりたい」と考えるようになりました。ただ広ければよいのではなく、命を守る場所でなければならないという意識が、話し合いの中で共有されていきました。

こうして、「どこに小屋をつくるか」という話し合いが始まりました。「温かい方がいいよね」「日が当たるところがいい」「でも、風が通らないと暑いかも」「いつも見られる場所なら、変わったことにすぐ気づける」と、鳥骨鶏の立場に立った意見が次々に出ました。自分たちがどうしたいかではなく、「鳥骨鶏にとってどうか」という問いが自然に中心に置かれていました。そんな中、Bさんが図書館で調べてきた本を紹介し、「鳥骨鶏は羽に空気を含んでいるから寒さには強いけど、暑さには弱いんだって」と教えてくれました。この言葉を聞いて、「これから教室は暖房をつけるよね」「それなら、風通しのいい廊下の方がよさそう」と考えがつながり、話し合いは一つの方向へとまとまっていきました。調べたことと季節の変化、これからの生活を結びつけながら考える姿が見られ、小屋の設置場所が決まりました。子どもたちは、自分たちの思いつきだけでなく、根拠をもとに判断する経験を重ねていました。

次に話題になったのは、壁の高さでした。今の小屋は40cmですが、「このままだと飛びこえちゃうと思う」「あと4か月したら、もっとジャンプできるようになるよ」「大人になると100cmくらい跳ぶって聞いたことある」と、成長を見通した声があがりました。一方で、「高すぎると、そうじのとき中に入れない」「毎日世話するのが大変になる」「ドアをつけたらいい」と、人が使う立場からの意見も出てきました。「鍵がないと、頭で押して開けちゃうかも」と、具体的な場面を思い浮かべる子もいました。「高ければ安心」という考えの子もいれば、「130cmは倒れそうでこわい」「中が見えないと、何しているか分からなくなる」と、不安や見守りやすさを大切にする声もありました。安心とは何か、安全とは何かを、それぞれの立場から考え合う時間となりました。話し合いを重ねる中で、「上は網にして、下は木にしたらどうか」「それなら風も通るし、中も見える」「おがくずも外に出にくい」「プラダンが弱くて倒れちゃう」「木の柱に網を張ればしっかりする」と、これまでの生活や経験を生かした具体的な提案が生まれていきました。以前的小屋づくりや他の動物の飼育経験で得た知識も自然と結びついていました。こうして、チームに分かれての小屋づくりが始まりました。



それぞれの工夫が詰まった小屋

壁チームは、まず下の部分に寒さを防ぐための板を貼ることにしました。初めてくぎ打ちに挑戦する子も多く、はじめは力の加減が分からず、くぎが曲がったり、なかなか入らなかつたりしました。「出てないかな」「さわってみて」と、指で確かめながら慎重に作業を進めていました。失敗してもやり直し、友だちの様子を見てまねし、少しずつこつをつかんでいきました。くぎを打つ子のそばで友だちが板を押さえ、「打ちすぎてもあぶないし、少ないとぐらぐらする」と間隔を測って印をつける姿も見られました。自然と役割が生まれ、互いに支え合う姿がありました。上の部分は、風通しと見守りやすさを考えて網を張りました。Cさんが顔の大きさを測り、「ここなら出てこないよ」と確認していました。結束バンドを使うのは初めてでしたが、「ジジジって音がするまでしめよう」と教え合い、板に穴をあけて通す方法も子どもたち自身が考えました。木枠をどちら向きにするかについても話し合い、「広いけど段差があぶない」「狭くなるけど安全」と意見を出し合い、「広さより安全が大事」と決めました。最後に木枠の間にできた小さなすき間にも気づき、「足をはさんだら危ない」と測って板を足し、細部まで気を配りながら、命を守る小屋へと仕上げていきました。



餌台チームは、「どうしたら食べやすいかな」と話し合うことから始めました。ただ置くのではなく、「無理な姿勢にならないかな」「みんなと一緒に食べられるかな」と想像しながら考えていました。実際に首の長さを測り、無理なく届く高さを考えて餌台の高さを決めました。水飲み場も一緒に置けるよう、少し広めに設計し、物差しで測る人、板を押さえる人、線を引く人と役割分担をしながら作業を進めました。脚は四本にして安定するよう工夫し、まずボンドで位置を決めてからくぎを打ちました。「ここでもいいかな」と何度も確かめ、完成後も押してぐらつきがないか確認していました。餌と水を置くと、烏骨鶏たちは落ち着いて食べ始め、「ちゃんと使ってくれているね」「高さ、ちょうどよかったね」とうれしそうに見守る姿がありました。

とまり木チームは、「遊べるどころと、休めるところがあるといい」と考え、高さの違う二本のとまり木を作りました。「高いところが好きかもしれない」「低い方が安心かな」と想像しながら高さを決め、足が痛くならないようやすりで時間をかけて磨きました。ぐらつかないよう下に板を付け、両側から支えて床にも固定し、安全に使えるよう工夫しました。「乗ってくれるかな」「気に入ってくれるといいな」と、完成したとまり木を前に、期待と少しの緊張をにじませながら見つめていました。



砂場チームは、実際に小屋の場所に板を置きながら、「みんなで入れる大きさ」を考えました。「砂あびするとき、くつついているよね」とこれまでの様子を思い出しながら広さを決めました。硬い板にくぎがなかなか入らず苦戦しましたが、繰り返し打つ中で自然とこつをつかんでいきました。砂集めでは、「かわいている方が気持ちいい」とひなたの砂を選び、ぬれた砂は干して変化に気づきました。「さらさらしてきたよ」と手触りを確かめながら、砂の状態にもこだわりました。しかし最初はなかなか入らず、「入り口が高いのかも」と気づいて切り直し、階段を付けました。「入ったよ」「砂をつついている」と喜びの声があがり、思わず顔を見合わせて笑い合う姿がありました。



完成した小屋の前で、「いっせーの一で、いってらっしゃい」。子どもたちは小屋を囲み、顔を近づけて中をのぞき込みました。「全然出ないね」「落ち着いている」「広くて、なんだこの空間はって思っているかも」と、烏骨鶏の気持ちを想像する言葉が聞こえてきました。「うんちしたよ」「安心してらってことだね」と、小さな変化にも意味を見だしているようでした。できたかどうかよりも、「今、どんな気持ちでいるのか」に目を向ける姿がありました。振り返りでは、「一人じゃできなかった」「みんなで協力したからできた」「がんばってつくってよかった」という声が聞かれました。さらに「ここをもう少し直したい」「もっとよくできると思う」と、完成後もよりよい環境を目指そうとする姿も見られました。自分たちの手で作った小屋が命の居場所になったことを実感しながら、子どもたちは達成感とやさしさ、そして命と共に生きているという実感を胸いっぱい味わっているようでした。

